トランプ米大統領の登場、米朝首脳会談の開催など、世界の政治的状況が大きく動き始めたここ数年、日本では安倍政権による憲法改正の動きが強まっている。第二次世界大戦後、日本は日米安全保障条約の締結とその細則にある日米地位協定によって米国軍の日本国内への大規模駐留を認め続けている。日本は今後、どこを目指して歩んでいけばよいのか。クリスチャンの政治家として活躍する瀬戸健一郎・山川百合子夫妻に聞いた。山川氏は2017年の衆議院議員選挙に立憲民主党より立候補して初当選。夫の瀬戸氏は議員事務所の事務所長を務めつつ、今年の参議院議員選挙への出馬を目指している。（聞き手・谷口和一郎）

「隔ての壁」を越える政治を目指して「武力によらない平和をつくる。」

政治家　瀬戸健一郎・山川百合子（衆議院議員）夫妻

――お二人とも日本アッセンブリー教団草加神召キリスト教会（天野弘昌主任牧師）の会員だということですが、埼玉県の草加市に政治基盤があるということですね。まず、それぞれの政治家としての歩みを教えてください。

瀬戸　私は高校生の時に交換留学制度を利用してアメリカの高校に留学しました。そこでホームステイをさせてもらった二つの家庭が、共に聖公会の熱心なクリスチャンホームで、彼らに導かれて洗礼を受けました。そしてアメリカで、「日米関係を等身大の関係にしたい」という志が与えられたんですね。そのために、政治を勉強して政治家になり、将来的には外務大臣になろうと思いました。

政治家としては、1990年に草加市議会議員選挙に立候補して初当選し、それを6期務めました。2001年には草加市長選挙にも出馬しましたが、落選しました。その間、ずっと自由民主党の議員として活動し、2013年の参議院選挙には日本維新の会から比例代表として立候補し、これも落選でした。その後は、日本維新の会から維新の党へ、さらに民進党（民主党が維新の党と合流して民進党に改称）に所属を変えていきました。

山川　私は、母親がクリスチャンで市民運動をやっていたのですが、母が埼玉県議会議員選挙に立候補したんですね。それで一度落ちたのですが、二回目のチャレンジの時にガンが分かって立候補ができなくなり、娘の私が推されて立候補し、当選をしてしまったのです。2003年のことです。それまではインドネシアでNGOの活動をしていました。県議会議員は2017年まで4期の半ばまで務め、2010年に当時市議会議員だった瀬戸と結婚しました。私は民主党の議員として活動し、2017年に行われた第48回衆議院議員選挙に民進党公認で出馬することになります。

ただこの選挙は、夫が最初に地元県議の推薦でノミネートされていたのですが、党の本部から、埼玉三区（草加市、越谷市）の現職

は自民党の男性議員なので、対抗馬としては女性を立てたいという強い意向が示されて、私が出ることになったのです。それと、草加市は保守的な政治風土が強いのですが、逆に草加の1・5倍の人口を持つ越谷市は、自治労が強い革新的な政治風土なんです。元々が自民党、日本維新の会だった夫より、ずっと民主党の看板でやってきた私の方が受け入れられやすいという判断もあったのだと思います。衆議院小選挙区というのは、その人物がどうかと言うより、結局は相対的なものなんですね。

ご存知のように、この選挙は、直前になって小池百合子さんが立ち上げた希望の党に民進党が合流する話になりまして、自分も希望の党に入って立候補するか、無所属で出るかで悩みました。無所属だと、よほどの有名人でもない限り当選は無理ですね。でも、小池さんが希望の党公認の条件として「安全保障法制への容認」を求めてきたので、無所属で出るしかないと思っていたところに枝野幸男さんから電話が掛かってきたのです。新しく立憲民主党を立ち上げるけど、一緒にやらないかと。それはもう、土壇場で開かれた道でしたね。結局、立憲民主党から立候補して埼玉三区では落選しましたが、比例復活で当選することができました。

――選挙活動は、どのようなスローガンを掲げたのですか。

瀬戸　私は妻が立候補することになって、それを全力で応援していく決断をしました。その時に与えられたみことばが、マタイの福音書5章9節「平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるからです。」ここから「武力によらない平和をつくる。」というスローガンが生まれました。数年前からシリア情勢の中でイスラム国の問題があって、後藤健二さんが殺害されるなど、ひどいことが起きていました。それをどう解決するのか、その一つの答えがここにあると思ったのです。

ノルウェーのヨハン・ガルトゥングという社会学者が「積極的平和」という言葉を発案しました。積極的平和とは、その社会が持つ構造的暴力――差別、貧困、抑圧、社会格差――を能動的・積極的に取り除くことで生み出すものです。これは、安倍内閣が言う「積極的平和主義」とは根本的に異なる概念です。安倍内閣が言うのは、「自衛隊を増強して米軍と一緒に行動することでもたらされる平和」です。私も山川も、それぞれの留学先で彼の学説に触れましたし、クリスチャンとして「武力によらない平和」こそ、この国が求める平和だと思っています。

ですから、小池百合子氏が安保法制の容認を「踏み絵」として差し出してきた時、私たちとしてはそれを容認できないと、希望の党への合流はありえないと。そうして玉砕覚悟で無所属で出ようと決めた瞬間ですよ、枝野さんから電話が掛かってきたのは。それは、枝野さんが新党を立ち上げる記者発表直前のことでした。私たちとしては人間的な打算を捨てて主に捧げきった瞬間に、新しい扉が開いた、そういう体験でした。だから、当選した時の感動というか衝撃は、非常に大きなものがありました。神様からの使命を受け取ったという感じですね。

――議員としては、どのような活動が始まっているのですか。

山川　国会というのは委員会ごとに分けられていて、私は外務委員会に入り、党外務部会の事務局長になりました。また結党直後でもあり、立憲民主党が外交安全保障基本政策をまとめていく特命チーム5人の議員の一人にも選ばれて、その事務局長も仰せつかりました。一昨年の11月に臨時国会が始まって、特命チームが12月にできて、すぐに原案をまとめてくれという話になりました。それで5月ぐらいにまとまったのですが、それを英訳して欲しいと座長から言われて、夫が全部英訳しました。そこに、「平和創造外交」という言葉があったんです。

瀬戸　過去の民主党時代に「平和創造外交」という言葉を使っていまして、これが今回の基本政策に採用されました。直訳すると「Peace Creation」なんですね。いろいろ議論はありましたが、

立憲民主党から山川百合子氏が出馬し、比例復活で当選

PROFILE

せと・けんいちろう 1962年、東京生まれ。交換留学生として、米国ベルエア高校卒。卒業式でのビル・アーチャー下院議員との議論から「等身大の日米関係」をつくるビジョンを抱き、政治を志す。獨協大学法学部卒。英エセックス大学留学。日本政治総合研究所事務局長を経て、草加市議会議員を6期務める。学問的知識と地球的視野で、常に切実な問題解決に取り組む政治活動を展開中。

私は何とかみことばに近い表現を入れたいと思いまして、今回の「平和創造外交」の英訳をPeacemaking Diplomacyとしました。先ほどのマタイ5章9節は、英語ではBlessed are the peacemakersとなっていますし、国連などの公式文書でもPeacemakingが用いられていましたので、最終的にそれが採用されました。平和創造という一つの言葉に、聖書的な意味が付与されたと思っています。

――今年は憲法改正の論議が高まっていくと思うのですが、憲法9条に関する見解をお聞かせください。

山川 憲法改正そのものを議論しちゃいけないとか、そんなことは思いませんが、9条に関しては守るべきだと思います。日本国憲法の国民主権、平和主義、基本的人権の尊重の三大原則が9条の議論に集約されていますので、それは急いで変えるべきではありません。それを言うと、「いつまでも憲法で認められない自衛隊がかわいそうじゃないか」という議論になるわけですが、「自衛隊は合憲」という立場で9条は変えないということです。

第九条　日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

②前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

瀬戸 国際社会というのは常に様々な戦争や事件を経ながら国際法を発展させていくわけですが、第二次世界大戦後は多くの国が民族自決権を旗印に独立を果たしていきました。そうして独立した国が、たとえ弱くて小さい国であったとしても、自衛権は持っているというコンセンサスが生まれていきました。いわゆる「自然権としての自衛権」ですね。その自衛権は日本にもあるわけです。9条をよく読んでいただけると分かりますが、「国権の発動たる戦争」と書かれています。つまり、「自衛権の発動」は含まれていないのです。国権の発動たる戦争とは、国が命令して先制攻撃を行う戦争と理解されますから、それは行わない。自衛隊は専守防衛に限るということです。

衆議員本会議場で代表質問を行う山川氏

――近年、日米地位協定の問題などがクローズアップされ、日本はとても独立国とは言えない、アメリカの属国であるという意見が一般的になってきました。戦後、一部を除いて歴代の日本の首相はアメリカ追従の姿勢を見せていますし、かといって、アメリカの意向に反することを言えば、民主党政権時代の鳩山内閣のように八方塞がりの状況になります。このアメリカのくびきを脱せずして民族自決も無いと思うのですが、いかがでしょう。

瀬戸 沖縄が戦後ずっとその矛盾を押しつけられてきたという事実があります。そして首都・東京にも米軍の横田基地があり、その一都八県にまたがる巨大な横田空域を、日本の自衛隊機も民間航空機も避けて通らなければなりません。主権国家の空を、自国が自由に使えないわけです。地位協定は日米安保条約に基づいて結ばれた取り決めですが、本来地位協定というのは、その駐留する国の主権の中で他国の軍隊がどれだけ特権を認めてもらえるかというものなのに、日米地位協定の場合は、まず米軍の主権があって、その中で日本の主権がどこまで認められるかという構造になっています。これでは占領時代と変わりません。私たちとしては、その問題提起をしていきたいと思っています。

外交の分野で言うと、日米合同委員会というものが地位協定に関する協議を行っています。日本側は外務省北米局のエリートたちです。でもアメリカ側は駐留米軍の制服組です。日本国の政権中枢が駐留軍と交渉している。アメリカ政府の中枢と交渉しているわけではないのです。これだけ見ても、いまだ占領地という感じですよね。「アメリカのくびき」というのは絶妙な表現だと思いますが、アメリカが右に行けば日本も右に行かなければならない、左に行けば左について行く、そういう姿ですね。民主主義を広めてくれたアメリカに感謝しつつも、やはり日本は自立した大人としての対応を取らなければならないと思います。国力の差こそあれ、「等身大の日米関係」を実現するべきです。

出エジプトを果たしたイスラエルの民が、荒野をさまよいながら「やっぱりエジプトにいたほうが良かった。」と言ったわけですよね。エジプトの奴隷でいた方が美味しいものが食べられたのにと。日本もアメリカのくびきの元にいたら安全だ安心だと、その呪縛から逃れられなくなっているん

PROFILE

やまかわ・ゆりこ 1969年、埼玉県草加市生まれ。恵泉女学園大学英米文化学科卒。英イーストアングリア大学留学。英ハル大学修士号取得。NGOピースウィンズ・ジャパンのスタッフとして、インドネシア西パプアに通算2年間駐留し、人道支援活動を展開。埼玉県議会議員を4期務め、2017年衆議院総選挙初当選。細やかに社会を見つめ、常に弱い立場の人々に光をあてる政治活動を展開中。

じゃないでしょうか。そういう感覚の人たちが日本を動かしているとしたら、いつまで経ってもカナンには辿り着けないんです。

山川 日本にいると気づきませんが、世界に出てみると、クリスチャンのネットワークというのは非常に大きなものがあるんですね。瀬戸は今年（2018年）1年間、海外のクリスチャンネットワークをいくつも見てきました。アメリカでは議員の中にも聖書の世界観を持った人が多くいますので、そういう部分に訴えていくこともできると思います。

瀬戸 最初に訪れたのは韓国でしたね。第50回韓国国家朝餐祈祷会に参加し、その後、韓国国会の講堂で行われた集会では、山川の名代ということでスピーチをする機会も与えられました。国家朝餐祈祷会には5千人ほどのクリスチャンが参加し、文在寅大統領も2時間半、そこにいました。その二つの集会に共通するテーマは南北統一で、その気運が高まっていることは肌感覚で感じましたね。

しかも、アメリカとの関係で言うと、日本よりはるかに自立した精神を持っている。アメリカがどう考えるかとか、アメリカの戦略がどうだとか、その議論の中では話題に出ないわけです。自分たちの民族の課題として南北統一があって、これはどこかの国に気兼ねする問題ではない、という感じなんです。正直、感動しましたね。日本としても、朝鮮半島の南北分断に関係がないとは言えない。ある意味、当事者意識を持って、民族の悲願である南北統一を支援していきたいと思わされました。

そして次に訪れたのが、エルサレムで開かれた朝餐祈祷会です。それが6月初旬にありましたから、アメリカ大使館のエルサレム移転の直後です。そこにはイスラエルのルーベン・リブリン大統領も招かれていましたし、70か国からゲストが招かれ、その代表が一人ずつ聖書朗読をするという場面がありました。私は山川の事務所長という肩書きで参加しましたが、英語では Chief of Staff、首席補佐官という意味になります。それで議員の代わりに朗読してくれということで、マタイ5章9節を選ぼうとしたら、「ここはイスラエルなので旧約聖書からにしてくれ」と言われ（笑）、私の座右の聖句でもある伝道者3章11節を中心に朗読しました。会場にはクリスチャンとユダヤ教徒の双方が来ていましたね。

ガーナにて。朝祷会のメンバーと

その後、私は日本CBMCの副理事長をしている関係で、CBMCの世界大会が開かれた北アイルランドのベルファストに行ってきました。ここもカトリックとプロテスタントが壁を作って戦った歴史がある街です。さらに、アフリカのガーナで朝餐祈祷会があるということで招かれたのですが、朝祷会は急遽中止になって、国連の事務総長を務めたコフィー・アナン氏の国葬が行われることになりました。その葬儀に参列することができたのですが、アナン氏はまさに世界の平和のために力を尽くし、ノーベル平和賞までいただいた人物です。私としても、とてもインスパイアされた葬儀でした。

この1年、私は世界のあらゆる「隔ての壁」がある地域に導かれ、その現実を見ることができました。でもクリスチャンは、そういう壁を越え、国境を越えて祈り合える、助け合える存在です。クリスチャンの政治家として、そういう繋がりを生み出していきたいと思いましたね。日米議員外交というのも、そういうクリスチャンというチャンネルを通して拡げて行ければと願っています。

――山川さんは2019年、どういう活動をしていきたいと思っていますか。

山川 こうした世界的な大きな流れに夫婦として用いていただければと思う一方で、国会の現場で働く身としては、その流れと国会の実態がなかなか絡み合っていかないもどかしさがあります。それをどう具現化していくかというのが課題だと思っています。2019年は7月に参議院議員選挙が予定されていて、衆参同日選挙という話もあります。その参議院選挙に是非、瀬戸に立候補してほしいというクリスチャンネットワークの皆様の声が高まっていますので、その実現がビジョンの一つです。

しかしこれも、具体的に私たちが何をしたからといって開かれるものではなく、神様の導きの中で開かれていくものです。これまでも、自分たちの努力によって道が開かれてきたという実感はなくて、やっぱり神様がそうしてくださったとしか言えません。そういう神様の導きの中で、私たちに与えられたビジョンや思いが熱伝導のように人々に波及していく、クリスチャンの中にも拡がっていく、そういうことを願っています。